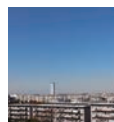


OUR NEW LIFE STORY ~ともに語ろう 未来へつなごう~

さこんやま

大学生による地域活性化事業・横浜市芸術創造特別支援事業



左近山の団地再生は、先進的な事例として多方面から注目を集めています。
 大学生による地域活性化を3人の専門家は「まさに左近山を未来へつなぐ取組」だと語ります。
 是非、「わがまちの取組」に参加し、左近山の魅力を広げていきましょう！

平成29年3月、旭区・横浜国立大学・UR都市機構・地域の4者連携で始まった「大学生による団地再生の取組」。大学生は実際に団地に住み、自治会や商店会など地域の皆さんの左近山愛に触発されながら、地域活性化に取り組みました。ここに横浜市の芸術文化活動支援も活用し立ち上がった「左近山アトリエ131110」も加わり、子どもの参加やアートの分野にも活動が広がっています。地域はオープンなマインドで、新たな地域の活動者がもたらしたまちづくりの視点(大学生とアート)を受け止め、「わがまちの取組」としてまちぐるみで運営しています。

つながる・うまれる・ひろがる わたしたちの左近山

左近山で活動する横浜国立大学「サコラボ」のメンバーと「左近山アトリエ131110」を運営するランドスケープデザイナー熊谷玄氏が地域との関わりの中で感じる“左近山の魅力”について語り合いました。



<サコラボメンバー(3期生)の名前>左から 河野奏太さん 長岡稜太さん 張叶橋さん 平田雄基さん

左近山の魅力は、 わがまちを盛り上げる 住人のエネルギー

熊谷:私は左近山の隣の小高町出身で、産まれたのはすぐ側の左近山中央診療所なんです。幼いころ、左近山団地が立ち上がるのを近くから見ていました。今、子どもが左近山小学校に通っていて、私自身もPTA会長をしていたりするので、この地域との関係性は深いです。アトリエの活動をする中で、私たちの考えていることとサコラボのやりたいことがうまくマッチングする部分があり、私たちが彼らにちょっとした橋渡しをしたり、何かをやるときにサポートしたりするという関係性が生まれてきました。隣にいる小山君は、左近山団地に住みながら活動を始めた1期生。今は横浜国立大学を卒業して東京大学の大学院生なんですけど、また左近山に戻って活動してくれているんです。こういう人がいるから、地域活動を継続する土壌ができているのかなと思います。

小山:一度左近山を出て東京に移り住みましたが、「自分がいざ身を置きたい場所ってどこかな」と改めて考えたときに、自分たちで街を盛り上げるエネルギーを持った左近山の人たちのことを思い出して、ここに住んだら楽しいだろうなと思って戻ってきました。

熊谷:左近山に住んでいる方たちの文化度の高さや熱量はすごいよね。なんというか、深い議論のできる人がめちゃくちゃたくさんいるんです。世代の異なる人たちがフラットに交流している。これってほかの地域では見られない光景です。なので国大生の子たちが来たとき、「よしよし、きたぞ」って思いました。(笑)左近山の人たちをもっと目覚めさせてくれるんじゃないかって。

小山:世代間で会話ができていくというレベルではなくて、がっつり酒を酌み交わすほどの関係性ができているので、僕ら若者に対しても“交流することが当然”という感覚のある方が多いように感じます。

河野:商店街の店舗でも、高齢者の方が主役として元気に活躍されていてすごいなと思います。

平田:すぐ近くで自転車で転んだとき、おばあちゃんが「大丈夫?」って3人も駆け寄って助けて

くれて、あたたかい街だな〜って感じました。

全員:おばあちゃんに助けられたの!?(笑)

思い思いに表現できる 暮らしの風景を、一緒に つくりたい

小山:左近山団地には50年以上の歴史があって、そこには僕らが知らない活動とか、素敵なポイントがいっぱいあると思うんです。それをもっと知りたいし、関わりたいなって思います。でも一方で、年々新しい人が左近山に入ってきているものの、なかなか地域のことを知るきっかけがない状態だとも感じています。そんな人たちにどう情報を共有するか、活動したい人や表現したい人を受け入れる状態をどうつくるかが課題ですね。

熊谷:たしかにそうだね。左近山団地には約5,300戸の住居があるので、SNSや講演会などで左近山の話をする、2回に1回ぐらいは「昔、住んでいました」という過去の住人に出会うんですよ。住民含め、取組に興味を持ってくださっている方へ情報発信をして、つながっていくことはとても大切だと思っています。

平田:長く住んでいる人ほどこの街に誇りを持っていらっしゃるんで、そんな方たちと一緒に何かやりたいという気持ちがあります。僕たちも負けないぐらいこの街が好きなので!

河野:少しでも左近山がおもしろくなったり、新しい出会いが生まれたりすることを、僕たちなりにできたら良いなと思います。

張:自分が住む街の人と顔を合わせることの大切さを左近山に住んで学んだので、ほかの方にもそういった気付きが生まれていくと嬉しいなと思います。私は、いろいろな国と地域を転々としてきたこともあり、どこに住んでも“住民”だという感



アトリエで開催した学生企画「左官展」に子どもたちは興味津々



アトリエ前で挨拶運動をする様子(週2回を半年間)



アトリエでのインタビュー風景。この日の展示はアトリエを設計した事務所の建築展。個性的なテーブルは学生が制作した。

じがしないんですけど、夜遅くに二俣川から原付でブーンと帰ってきて左近山の中に入るときは、「私、ここに住んでるんだ」っていつも思います。

全員:おー。それすごくわかる。

熊谷:あるよね。旅から帰ってきたときに、心のハードルが一段下がる瞬間。横浜駅に着くとちょっと帰ってきた感じがする、みたいなね。

最後に私から。“自分が表現したいことを表現できる場所”がすぐそばにあるのは、豊かな暮らしの第一歩なんじゃないかと思っています。ですので、「やりたい」「やってほしい」という思いを、ぜひこの場所にぶつけに来てもらえたら嬉しいですし、その手助けをしていきたいです。

いくら良いものをつくっても、それが外からやってきたものなら住民は単なる“利用者”でしかありません。左近山に住んでいる人が、自分たちの住む街をすごく大切に、ベンチ1つつくるにもみんなで集まってつくる、そういった暮らし方が当たり前に行われている風景が最終的なゴールですね。何年かかるかわからないけれど、振り返ったときに「きっかけはあれだったよね」って言われる活動をしていきたいです。まだまだこれからですね!

左近山アトリエ131110

左近山に住む人の「表現したい」を実現できる場所。スペースをレンタルして展示会やカフェ運営など、さまざまな方法で利用が可能。やりたいことを実現するための相談もできる。

サコラボ

「左近山の架け橋」をテーマに、横浜国立大学の学生が主催する地域活動。左近山団地を舞台にさまざまな取組を行なっている(現在17名)。実際に左近山団地に住みながら活動しているメンバーもいる。

熊谷玄

ランドスケープデザイナー。STGK Inc.(株式会社スタジオゲンクマガイ)代表。平成29年、左近山団地の中にある広場「左近山みんなのにわ」を手がけ、その後「左近山アトリエ131110」の運営を開始。左近山に関わりながら、人の暮らし風景のデザインを行なっている。

想いのバトンをつなぐ

左近山団地は昭和40年代に開発された戸建てを含む約5,300戸の団地群で構成されており、団地内には公園や広場など緑あふれる風景が広がっています。この左近山を愛しささまざまな取組を行うお二人が、若者たちに伝えたい想いを語っていただきました。



ふるさと左近山をひらき、 多様な人・活動を受け入れたい

左近山で育った人、少しでも住んだことのある人、関わったことのある人が、この場所を“ふるさと”だと思えるような地域にしていきたい。そんな思いで始めたのが、NPO法人オールさこんやまでした。

コミュニティレストランの「ほっとさこんやま」や「おでかけワゴン」、旭区との協働事業である「大学生入居事業」などの活動が生まれ、新旧さまざまな取組が互いにサポートし合うようになったことで、ここ最近では人付き合いの幅がすごくある地域になってきていると感じます。

大学生が団地に移り住み、地域を見つめる“新しい視点”が加わったことは大きな変化です。学生たちの活動に対して、地域の人たちの期待感が上がっているのを感じます。

これからは、団地特有の閉鎖的な雰囲気を取っ払い、もっと外から人を受け入れる地域にしていくことが大切。気軽に地域のいろいろな活動に関われるのって楽しいでしょ？新しい人、どんどんウェルカムですよ！



林重克さん

左近山連合自治会の会長で、NPO法人オールさこんやまの理事長も務めている。このNPO法人は平成25年5月に設置され、全世代を対象とする福祉保健活動を推進している。

大学生と地域をつなぐ

ビアガーデンやランチイベントなど学生自らが企画したイベントを実施し、地域の活性化に取り組む「大学生入居事業」を運営している。



ビアガーデンイベント「サコノミ」(計5回)



ランチイベント「サコメシ」(計5回)



ほっとさこんやまで活動報告会を開催

住まう人の安心と誇りを育む、 新たな発想力に期待！

「あなた、やっぱり左近山の人ね」そう言われるほど、左近山の人はどうしてかおせっかいな人種。私はそれを誇らしく感じています。ここ数年で、商店街にはアトリエができ、学生による地域活動も始まりました。まさに、“新しい風”が吹き始めています。開発から50年が経つ住宅地にとっては異色と言って良いほど洗練されたデザインが突如として現れたのですが、これが「あら、すてきね」と地域に馴染んでいく。左近山の人々の柔軟さに驚きました。

林会長がオープンなマインドで“新しいものを受け入れる土壌”を築いてくださったおかげで、私たちの世代も地域で自由に活動させてもらっているし、若者が発言できる場所も生まれ、世代交流ができています。

おせっかいで、あったかくて、新しいものを受け入れる軽やかさを持った左近山人。左近山に住む人たちが、安心と誇りを持って生活できるような街にしていくために、大学生の発想力にこれからも期待しています。



福村正さん

同団地入居開始と同時に開院した左近山中央診療所の院長を務めている。「日曜ほっと」や商店街イベントの企画などで中心的な役割を担っている。

大学生と子どもたち、多世代をつなぐ

「日曜ほっと」は、ほっとさこんやまで毎月第3日曜日に開催している。昔遊びを大人が子どもに教えることで世代を超えた交流の場となっている。また商店街では毎月第4日曜日に、食べ物の屋台の出店や地元バンドの演奏ステージなどを設け、賑やかなお祭りを開催している。こうした取組に大学生も連携している。



日曜ほっとで学生が企画したガーランドワークショップ



商店街の夏祭りで行った学生企画「大学生を探せ」

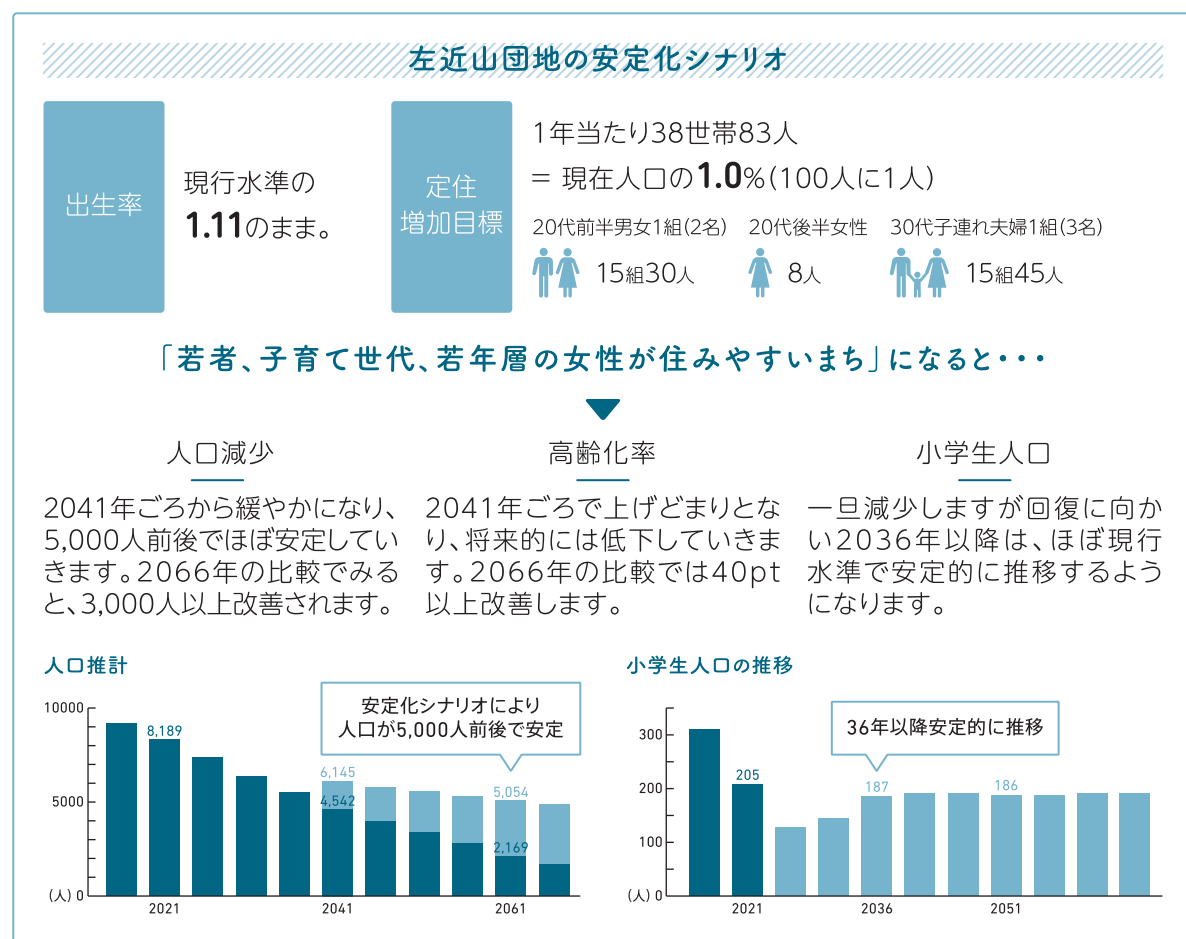


商店街で豚汁を提供

持続可能な「左近山団地」に向けた1%戦略

～地域人口の現状分析・予測・安定化シナリオ～

未来は変えることができます!近年、都市近郊の団地の高齢化や人口減少が全国各地で問題となっています。左近山団地でも20年以上減少が続き、今後は世帯の減少による空家の発生が予測されています。しかし、その空家へ毎年、地域人口の1%程度の定住増加をするだけでも、子どもの人口が安定しまちが持続化します。今回、左近山団地の人口の現状分析、予測、安定化シナリオをまとめてみました。人口がそのまま現行で推移するとどうなるか、住民みんなで地域の未来像を見つめ、具体的な目標を持って、持続可能な地域社会の姿を描いていくことが重要です。これから訪れる「循環型社会」では、地域全体が地域の資源(ヒト、モノ、カネ等)を循環し住み続けていくことが求められます。子どもたちの未来のために、頑張りたいものです。



藤山 浩氏
 一般社団法人 持続可能な地域社会総合研究所 所長
 昭和34年、島根県益田市生まれ。一橋大学経済学部卒業。博士(マネジメント)。島根県中山間地域研究センター等を経て平成29年より現職。総務省地域力創造アドバイザー他、国・県委員多数。専門は、中山間地域政策、未来社会論、地域計画、地域分析(人口・経済)、地域づくり支援。著書に「日本はどこで間違えたのか」など。

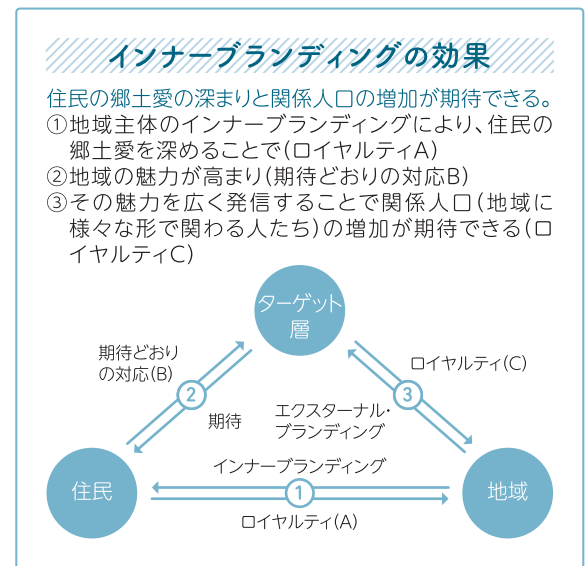
まちのブランドをつくること、

くらしの喜びやまちへの誇りを高めること

それは“参加”からはじまる

左近山団地では、他の地域と比べて要介護認定率が低いと伺っています。その理由として、地域の方から「地域活動が活発なことで健康な住民が多いのではないか」とのお話を伺いました。このことを解き明かすうえで参考になる「ロゼト効果」に関する研究をご紹介します。1950年代に米のロゼトという町で、心筋梗塞による死亡率が著しく低いという結果が出ました。生活習慣は周辺地域と変わりがなかったのですが、この町は地域活動や住民間の交流が盛んだったのが原因だと考えられています。しかし、個人と地域の繋がりが希薄になった60年代以降の死亡率は近隣と差が無くなってしまいました。この様な絆が健康に及ぼす良い影響は「ロゼト効果」と呼ばれています。なぜ、深い人付き合いによって、健康に良い影響が出るかは厳密に分かっていませんが、人々の交流が脳や免疫系、代謝系に良い影響を与えるからだと考えられています。

まちづくりの活動は、地域に住む方々が、ご自身の家族、良き友、良き隣人との関係を深めるプロセスと言い換えることができます。マーケティングの概念として、「インナーブランディング」という考え方があります。



アートカフェや大学生を地域の新たな魅力と認識することが重要

これは、企業理念や価値を定義し、自社の従業員に対して浸透と共感を促す活動を指します。このことで、企業が期待する方向と従業員が目指す方向が一致し、商品やサービスの向上や従業員の満足度向上につながると考えられています。左近山団地では、コミュニティレストランや商店街など既存の地域活動に加えて、「左近山アトリエ 131110」が主催するアートイベントや団地に入居する大学生による地域活性化の取組が展開されていると聞いています。こうした活動を住民が「地域の魅力として認識し、そこに参加して盛り上げる」ことは、インナーブランディングの発想であり、地域に対する誇りや愛着を高めることとなります。

最後に、まちづくりに取り組む皆さんへのエールをお送りします。マーケティング研究に「サティスファクション・ミラー」という概念があります。子どもの頃、背が伸びると鏡の中の自分も背が伸びたように、従業員の満足度が高まると顧客の満足度も高まる、という概念です。つまり、皆さんが楽しむ姿こそが、住民の方に喜んで頂く、そして、その輪に新たに加わって頂く、1番のマーケティングです。

コロナ禍にあっても、地域の皆さんのために取組を続けてこられた皆様に改めて敬意を表します。今後、皆様の活動がより大きな充実したものになることをお祈り致します。

鶴見 裕之氏
 横浜国立大学 大学院国際社会科学研究所/経営学部 教授。博士(社会学)。公益財団法人 流通経済研究所を経て、平成22年4月横浜国立大学に着任。准教授を経て、令和2年4月より現職。令和3年4月より学長補佐。専門は、マーケティング。近著は「オムニチャンネルと顧客戦略の現在」(千倉書房)、「消費者行動の実証研究」(中央経済社)等。

さこんやまを語ると 未来が輝いていく

『さこんやま』は、左近山団地の力を“人”から探し出そうとする冊子です。

サコラボ1期生の小山さんは「『自分がいざ身を置きたい場所ってどこかな』と改めて考えたときに、自分たちで街を盛り上げるエネルギーを持った左近山の人たちのことを思い出して、ここに住んだら楽しいだろうなと思う」と述べています。

サコラボ3期生の張さんが「夜遅くに二俣川から原付でブーンと帰ってきて左近山の中に入るときは、『私、ここに住んでるんだ』っていつも思います。」と述べる“ここ”とは、単なる地理的な範囲ではなく、そこに暮らし、活動する“人々”を含めての“ここ”のはずです。

地域の力を“人”から探し出すと最初に記しました。言い換えれば“人の持つ、地域に関わろうとする意欲”が地域の力になるということです。では、どうすれば“地域に関わろうとする意欲”は生まれ、大きくなるのでしょうか。

私の研究では“語れることで意欲は生まれる”ことがわかっています。“地域を語れるようになれば、地域に関与したくなる”と言うこともできます。

“地域を語る”ときに大事なことがあります。ひとつは物語です。物語として地域を語るとワクワクします。もうひとつは、期待としての未来からの視点です。こうあることができる場所として地域を語る。それによって、その未来を生む今がここ

にあると感じてドキドキします。

『さこんやま』は、左近山団地をワクワク、ドキドキと語ることでできる素材でいっぱいです。

サコラボ3期生の平田さんは「自転車で転んだときも、おばあちゃんが『大丈夫?』って3人も駆け寄って助けてくれ」たと語ってくれています。小さな物語としての左近山団地です。

連合自治会の林会長は「左近山で育った人、少しでも住んだことのある人、関わったことのある人が、この場所を“ふるさと”だと思えるような地域にしていきたい。」と述べます。そうした左近山団地の未来から見たとき、団地のひとつひとつがキラキラと見えてきます。

もちろん、意欲が意欲のままにとどまれば、地域はよくなりません。意欲を実際の行動に向けて開く“関与の窓”が求められます。行動する“きっかけ”“関わりしろ”とも言えます。

『さこんやま』に書かれている「左近山アトリエ131110」アートイベントはとてもわかりやすい“関与の窓”です。これに限らず、コミュニティレストランなどの関わりしろも紹介されています。

『さこんやま』をもって団地を歩いてみましょう。新しい光が左近山団地に注いでいることが実感できるはずですよ。



河井 孝仁 氏

博士(情報科学・名古屋大学)。東海大学教授。専門は行政広報論、シティプロモーション。『「関係人口」創出で地域経済をうるおすシティプロモーション2.0』、『「地域の人」になるための8つのゆるい方法』など著書多数。



「左近山アトリエ131110」ではアートに関するワークショップやイベントを開催。
写真は令和元年に開催した「左近山アートフェスティバル」の様子

©菅原康太